

歴史 (月3)シケプリ

第一講 地中海世界の古層

1、時期 紀元前四千年紀～紀元前二千年紀

一万年前 氷河期の終了、人々の定住化、村落の形成

九千年前 麦の栽培開始、羊の飼育、牛、豚の家畜化（西アジア、やや乾いた草原地帯、具体的にはザクロス山脈麓）

（前四千年紀 日干し煉瓦、焼成煉瓦の使用）

2、メソポタミア

語句「シュメール人問題」＝シュメール人はいかなる起源をもつのかという問題

メソポタミア文明の発展

南部での灌漑農業技術革新 ウルク期（前四千年紀後半）シュメールの都市化の開始

活発な交易活動 文字による記録（粘土板文書）システムの成立（前3100年ころ）

周辺地域へ拡大（セム語系など）

cf シュメール語表記の変化 絵文字 楔形文字

都市国家群の成立 ～文字とともに整備

神殿、聖域の整備 都市化の進展

古代メソポタミア...多神教の世界、神々にも栄枯盛衰が見られる

都市を守護する大神、個々人、家系を守護する小神

シュメール人...上記以外に半神半人の英雄があがめられる『ギルガメッシュ叙事詩』

セム語系勢力の強大化

セム人、シュメール人の傭兵、雇われ人として流入 アッカド人の台頭

サルゴン王（在位前2334～2279）によりアッカド王国建国（前24C半ば）

言語 古アッカド語 アッカド語（セム語系、楔形文字で表記）

古代セム語系言語の総称として存在

シュメール人の復興、凋落

時期 ウルク第3王朝（前2112～2004）

初代国王「シュメールとアッカドの王」と名乗る。

ジグuratの建設などの盛んな活動。

土壌の表面に蓄積する塩分による害

穀物生産量の低下 シュメール人都市の衰退（前三千年紀末）

シュメール、アッカド地域のセム化

前三千年紀 シュメール系、セム系勢力の競合 お互いの融合が進む。

前二千年紀 シュメール人地域にセム語系遊牧民アムル人（アモリ人）の流入

先進都市文明に順応できた人々、自ら都市文明を創る

先進都市文明に順応できなかった人々、カナン人と呼ばれる（旧約聖書より）

イシン=ラム(ル)サ時代（前二千年紀初頭）諸都市国家、諸王朝の分立

（古）バビロニア王国（アムル人の一王国によるメソポタミア統一）の誕生。

最盛期 ハンムラビ王（第一王朝第6代、前1792～1750） 国力強化

- 神殿、要塞の修復、治水灌漑
- 外征 支配領域の拡大
- 官僚組織の整備、商業の促進
- ハンムラビ法典（道外復讐原則だが身分差別も存在）

バビロニア王国時代 アッカド語によるシュメール文学の復興

cf 『ギルガメッシュ叙事詩』

数学の高度な知識、天文学の創始

私経済の繁栄（大農地・動産の私的運営、土地・資産を活用する都市住民）

3、エジプト

先王朝時代

乾燥化（大河のほとりに人が集まる）、灌漑農耕の発達 農耕の定着

cf 「エジプトはナイルの賜物」（ヘロドトス）

農業生産の発達、交易規模の拡大 貧富の差の発生、階層分化 cf 墓地の大型化

上エジプト（南部河谷地帯）の部族国家＝ハム語系「原王国の出現」

統一国家の形成 ～伝説上の王メネスによる上下エジプトの統一

上エジプト ～領域国家「王国」 下エジプト ～都市国家「王国」

統一の過程 『ナルメル王の化粧版』に図示 上エジプトによる統一 初期王朝の誕生

初期王朝時代（前3000?～前2625?）

第1、第2王朝～不安定な時期、弱体な王権

第3王朝の時代～王権強化の進展、官僚制の整備

cf . ファラオ（大きな家）は新王国時代に使用

ヒエログリフ、書記の登場～神や王への称賛、有力者の事跡書きとめ

古王国時代（前 2625？～前 2160？）

巨大ピラミッドの建設 cf.「奴隷酷使説」現在では誤りと考えられている
「公共事業説」

✧ 墓の男女比が半々、子供も存在

✧ 労働者の出席簿の存在

奴隷にしては優遇されすぎ？

✧ パンとビールを労働者に与える誓約碑文

自由身分を使用か？

7～10月の農閑期の農民救済目的とした国家プロジェクト

第1中間期（前 2160？～前 2040？）

古王国時代の王権の衰退 混乱

中王国時代（前 2040？～前 1786？）

上エジプト（南部）による下エジプト（北部）の征服という基本形の踏襲

中央集権化、官僚機構の整備

ヒエログリフの使用（パピルスに書き記す） ヒエラティックの誕生

鉄資源の不足による衰退 ヒクソスによる侵略 滅亡

宗教観の変化

古王国時代...偉い人（ファラオなど）だけに永遠の命が与えられるという信仰

中王国時代...来世信仰（あの世で永遠の命に与れる） ナイル川の定期的な氾濫による

cf.「死者の書」...善良な人は来世での幸福が約束されるという考え方の誕生

第二中間期（前 1786～前 1542頃）

印欧語系民族の活躍...ヒクソス（ミタンニ、ヒッタイトの影響）の北方からの侵略

馬、戦車の使用

新王国時代（前 1542～前 11世紀頃）

馬、戦車の重用（cf. 第二中間期）...領土拡張策の段階へ 帝国主義

トトメス3世（前15世紀）...アジア遠征、ユーフラテス流域まで領土拡大、最大版図

ラメセス2世（前13世紀）...帝国再建、大規模な建築活動（アブ・シンベル神殿等）

ヒッタイトとの和平（世界最初の国際条約？）

第2講 神々のささやく世界

神々の声...現在では統合失調症などと認定

当時は本当に神々の声を聞いたと認識

メソポタミア

王＝祭司（神々に最も近い存在）神権政治

cf.『ギルガメシュ叙事詩』...語りかける神々への応答

ありふれた記述の中にも「神々の声」が存在

エジプト人の世界観

王（ファラオ）自身が神として存在、あるいは神の化身

動物への信仰（詳細後述）

自然界と超自然界の区別があいまい

あらゆる神々は創造神プタハの声（舌）の顕現（メンフィス神学より）

『死者の書』～「バー」（霊魂 実体）…視覚的

「カー」（生命力 エネルギー 働きかける力 神々の声）…聴覚的

「声正しき者」（善良な人）オシリス（死せる王の声）の国に迎え入れられる。

第3講 激動と神々の沈黙

オリエントの宗教

メソポタミア

自然発生的（歴史上のこととして成立した宗教ではない）

先史的、自主的、民衆的

秘儀的でない：神々は尊敬され奉仕されるが、愛されるのではない

神々にあふれる世界（多神教） 神々の序列化の進展 神々の統合、結合

cf. 第1講、2. 古代メソポタミア

来世への無関心（来世とは不可知なる世界だから）

cf. 『ギルガメシュ叙事詩』…現世での不老不死を望むが最終的に死すべき人間の
運命を悟る

宗教の発展的段階

前4千年紀 「飢餓の恐怖」 自然の力に対する人間の非力、豊穡への期待

前3千年紀 「戦争とその惨害への恐怖」 都市ごとの守護神（大神）の出現

前2千年紀 「個人の不幸への恐怖」 倫理的にも良き生活、神の絶対視、小神

エジプトの宗教

多神教と動物信仰

大自然の圧倒的な力（ナイル川） 人間の無力 超越的存在（動物）を崇める
神学…宇宙創造の教義（創造神＝アトゥム 太陽神ラー）

ヘリオポリス神学、ヘルモポリス神学、メンフィス神学の登場

オシリス信仰（死の克服：永生を希望するエジプト人の模範）

来世信仰の発展

古王国時代…偉い人（ファラオ＝神の化身）のみがあの世界によみがえる

中王国時代…普通の人々もあの世界に蘇る（来世信仰の始まり）『死者の書』

新王国時代…来世信仰の広い普及

『死者の書』 呪文、オシリスとの対面、罪の否定告白

一神教の誕生～アメンヘテプ4世（アクエイアテン、イクナートン）による
イクナートン（前14世紀中頃）以前...太陽神アメン・ラーの信仰普及

それに便乗するテーベのアメン神官勢力の弊害

神官勢力の駆逐を目指す アマルナ遷都 アテン神（唯一神）への信仰強制

なぜ一神教は発生したか？

*ヤン・アスマン説

儀式と神話を中心とする宗教「暗黙の神学」 多神教

現実世界を説明する思索の宗教「明示の宗教」 一神教

*仮説

- アルファベットの開発（文明の整序化、単純化） 読み書きの一般への普及
現代人の思考法への近似化（思考の合理化） 神々の声が失われていく
- 釈迦の混乱、危機、虐げられた民族、階層の怨恨 強大な力への憧憬 一神教

バビロニアの宗教

主神マルドゥクの信仰

シュメール時代...アン神、エンリル神の信仰

セム人の移住 アン神（天空神）、エンリル神（大気神）よりマルドゥクへの王権の授
与という形式をとる必要。

アッシリアの宗教

アッシリア＝「アッシュル神の土地」

都市神（大神）アッシュルこそ神々の中の神

カナンの宗教

農耕への依存 豊穣への期待高まる

自然界の豊穣を祈る祭り

動植物の多産を祈願する性的祭儀

神々の世界（多神教）

ヘブライ人の宗教 ～バビロン捕囚をきっかけに民族的宗教を創立

ヘブライ人（ハビルの一部）＝都市国家離脱者＋牧羊民

モーセの十戒『出エジプト記』 ユダヤ教の原型、ヤハウェ

ヘブライ人の王国

カナン都市国家群、ペリシテ人戦士団との抗争

ダビデ王によるイスラエル勢力の統一

ソロモン王による官僚国家の建設 繁栄

ソロモン王死後 統一王国の分裂（南部ユダ王国、北部イスラエル王国）

新バビロニアによるユダ王国滅亡、バビロン捕囚

ユダヤ教の成立（『旧約聖書』の編纂）

第4講 世界帝国と宗教の変貌

オリエント（西アジア）の風土

メソポタミア、エジプト...「肥沃な三日月地帯」の中心部 一次文明

シリア、アナトリア...大河と流域平野に恵まれない 二次文明

cf. 一次文明...自発的に発展した高度な文明

二次文明...一次文明の影響を受けて発生した文明

印欧語系諸民族の出現（前17世紀頃から）

ヒッタイト（鉄器、戦車）、カッシート？、フルリ？、ミタンニおり

？...印欧語系、セム系どちらでもない。（語族系統不明）

カナン人の小都市国家（部族国家）群 ~ アッカド語「キナッフ（染料）」に由来
シリアを中心とする地域に群立

カナン人とは？

- 西セム語系の土着民
- 砂漠の遊牧民アモリ人（山間地に小規模な定住地を形成）
- 北方から馬をもって南下してきた印欧系の人々
- 北方から移住してきたフルリ人

シリア...乾燥した地域 水源地、牧草地をめぐる都市国家間の抗争

干ばつ、飢饉のときには流浪する（都市国家離脱者＋遊牧民）

ヒクソス ~ 東方からエジプト（中王国）に侵入した異民族の総称

「外来の支配者」...エジプトによる呼称

セム語系の人々、アーリア人（東方の印欧語系の人々）、フルリ人（印欧語系でもセム語系でもない人々）から構成される混成集団

馬にひかれた戦車を使用 ナイルのデルタ地帯に勢力伸張

ハビル（アビル） ~ 人種名ではない

ひとつの社会階層、あるいは身分、共通の境遇にある人々（移住者、寄留者、被保護者）？

オリエント各地に出没

ヘブライ人の祖先か？ ~ 法的保護を持たない不安定な状況が類似

「海の民」

集合離散しながら東地中海沿岸に出没

故郷を離脱した人々の集団 「海洋の遊牧民」

「海の民」の影響

ミケネ時代（ミケーネ文明、トロイア王国）の崩壊、
ヒッタイト王国の滅亡（製鉄技術の海の民への移行）、カナン地方の北シリア諸国の都市国家群の崩壊

パレスティナ海岸平野に「ペリシテ人」として定住。ie . ペリシテ人 = 海の民の一部

アルファベットの開発

前 2000 年紀末...カナン地方の混乱

アラム人（西セム語系）ヘブライ人の侵入

「海の民」との接触 カナン人の一部、海洋民化 フェニキア人

フェニキア人...シドン、ティルスを拠点とする地中海一帯での交易活動、西方植民

アルファベットの開発（原カナン文字、原シナイ文字の影響）

読み書き能力の普及への助走路

エジプト新王国におけるアクエイアテン（アメンヘテブ 4 世）

～アメン神官団の腐敗への不満 駆逐を目指す 一神教（アテン神）崇拜

アマルナ遷都 cf . アマルナ美術（写实的）...前代美術への対抗

一神教の成立 神々の沈黙

混沌と抑圧の中にあるイスラエルの民（『詩篇』、『ヨブ記』） 強大な力への憧憬

世界帝国の出現と周辺地域（前 1000 年紀前半）

前 1000 年紀初頭 「海の民」の出没 オリエント世界の混乱

ユーラシア全域で騎馬遊牧民が誕生 定住民の生活様式、国家の在り方に影響

騎馬遊牧民...歴史上最初の騎馬遊牧民 キンメリア人

スキタイ...機動性高、神出鬼没 定住民族にとっての脅威

世界帝国の出現...遊牧勢力との対抗上団結したため

アッシリア帝国 ～農耕民族でありながら騎馬を用いる

「肥沃な三日月地帯」の中心の都市アッシュル 交易の中心地として繁栄

（前 2000 年紀前半）

商業的伝統に加え、軍国主義の傾向 領土拡大の開始

（前 2000 年紀後半）

大型戦車の導入、騎馬軍団の登場（スキタイなど騎馬遊牧民の影響）

強圧の世界帝国 = 被征服民を都合のよい地域へと強制移住

サルゴン王時代...最盛期

交易の拡大にも努める 国際商業ネットワークの成立

強圧的な態度 被征服民の反感 4 つの覇権の分離、独立

四国分立 ～カルディア、メディア、リュディア、エジプト

カルディア...バビロン捕囚

ヘブライ人（ユダヤ人）の民族的アイデンティティの強化

ユダヤ教、ユダヤ人国家の形成

メディア...スキタイの影響 騎馬戦術にたけている

リュディア...最初に貨幣を用いる

メソポタミア文明の終焉...バビロンの栄華に代表される文明の終焉

アケメネス朝ペルシア (前 550 ~ 前 330)

ペルシア人...メディアの一派パールサ人 (印欧系、イラン高原の民) に由来

スキタイ人の騎兵技術に学ぶ 軍事技術、情報伝達に大きな進歩

アケメネス朝...中央集権体制による帝国支配

- ◇ 通信網の整備 (「王の道」、駅伝制)
- ◇ サトラプ (総督) 行政の監視「王の目」(公然と検査、監視)
- ◇ 「王の耳」(密偵、スパイ使用)
- ◇ 寛容な支配体制 (貢納と軍役の義務を果たせば伝統、宗教を尊重)
- ◇ ペルシア語に加え商業交易ではアラム語、アラム文字を国際共通語として採用 諸民族の交流盛ん、新しい世界秩序の形成

第 5 講 都市国家の成立

都市国家以前 ~ ミュケナイ時代 (前 2000 年紀後半)

シュリーマンによるトロイア王国発掘、ベントリスによる線文字 B の解読

「ピュロス文書」よりピュロス王国の事例

王宮社会と村落社会に大別

王宮社会...王 (ヴァナカ) > 軍司令官 > 従士団 > 王所有の奴隷

村落 (ダーモ)...村落の首長たる豪族 (クァシレウ) の指導下に民衆

大工、鍛冶屋など存在するも基本的には農民

王宮が多くの村落の上に君臨

『村落支配を基盤とする萌芽的な官僚機構を備えた貢納王政』

オリエントの専制王政に類似 (後代ギリシア・ポリスとは構造が異なる)

のちのポリスの国家領域より広大な諸王国の群立状態

ホメロスの社会

文化的創造力の弱体化「暗黒時代」、人々の生活基盤が脆弱、実態不明

ミュケナイ時代 (叙述の対象)

暗黒時代 (口承伝承が育まれた時代)

ポリス成立初期 (ホメロスの生きた時代)

ホメロスの叙事詩の中に含まれる

3 つの時代層が複合された世界

当時の社会...村落共同体ごとの小さな社会、豪族と民衆の協調

豪族...クァシレウ (ミュケナイ時代) バシレウス (王) (古典期ギリシア語)

民衆...ダーモからデーモスへと変化

バシレウスとデーモスの協調関係

都市国家の成立：シュノイキスモス（集住）

前述の村落が地の利に恵まれた地域に集まって大集落を建設 ポリスの成立

バシレウスの集住

cf. アッティカ地方での墓跡数の急激な増加

ポリスとエトノス

エトノス...都市国家の形態までにはいたらない集落

- ポリス...中心市（アスティ）と田園地帯から成り立つ
中心市...アクロポリス（城砦）、アゴラ（広場）、神殿、ギムナシオン（体育訓練所）
田園地帯...いくつもの小さな村落、農耕地、牧草地、森林
- エトノス...中心市を持たない集落の集合、（非ポリス国家）エーゲ海から離れたところ

時代を降る エトノス的形態からポリス的形態へと推移

前8世紀...ポリス社会 = オリエントに近い地域で成立

ギリシア人の植民活動 ~ギリシアは平野に恵まれないため

シチリア島、イタリア南部（マグナ・グラキア）、リビア、黒海沿岸地域など

ポリスの理念

村落社会での豪族たるバシレウスと民衆たるデーモスの協調関係

農耕市民の戦士共同体 共同体の中の平等原則、外部に対する閉鎖性

ポリス市民（ポリス社会の担い手）= 国家を防衛する戦士

武具、武器の自弁の必要性

有事...武具自弁の財力をもつ国家防衛の戦士であること

平時での国政への発言力へとになっていく

ポリスでの国力増大 重層歩兵密集戦術が確立

スパルタ

ラコニア一帯における覇権の確立

重層歩兵密集隊を担う平民の地位の確立

リュクルゴス体制 = アコーゲー（教育・軍事訓練と生活様式）から成り立つ

厳しい訓練のもとに軍人としての規律を身につける

スパルティアタイ = ホモイオイ（平等者）

ペリオイコイ（劣格市民）

ヘイロータイ（先住民、奴隷、隷属農民）

（ラコニアに住む）ラケダイモン人

国制（レトラ：リュクルゴス体制による国家）

長老会（合議機関）...王2人 + 長老28人

民会（スパルティアタイによる）...エフォロス（行政担当者）5人

アテナイ

族長としての王（バシレウス）による統率 ポリスの成立

王権の分化 ~ バシレウス（祭祀） ポレマルコス（軍事） アルコン（行政、政治）

+ 6 人の書記 = ポリス国家の執行部

歴任者によるアレイオス・パゴス会議（長老会的なもの）

貴族による集団指導体制

平民の強力化 貴族・平民の対立の顕在化

ドラコンによる法律の公開、最初の成文法

（私的）血讐の禁止 法を背景とする公権力による規制

ソロンの改革（前 6 世紀初め）

- 「重荷降ろし」 借財農民の負債を帳消し
- 財産級制度（ティモクラティア）...門地より財力（市民義務履行能力）に応じた政治的権利

中小農民の救済、国家戦士としての義務をになう人々に国政発言力を与える

ポリス市民たることの本来のあり方を確立することを目指す

貴族・平民間の対立 = 党争（スタシス） = 様々な要求を持つ平民層を従えた有力貴族たちの抗争

平民層の不満増大 收拾がつかなくなる 僭主（テュラノス）による武力による強力な独裁、反ポリス的

ペイシストラトスの君臨...市民からの武器没収、10 分の 1 税の課税、一族、側近を要職につける...ポリスの平等原則に合わない反ポリス的
平民層の不満を背景とした独裁のため農民の保護育成、旧来の貴族政治の打破を目指す 民主的

平穏、国力の充実 cf. コリント式陶器 アッティカ式陶器

貨幣鑄造の本格化

第 6 講 古典期ギリシア

僭主政と民主政

ギリシア世界の多様性 cf. シチリア島...僭主政の優勢

ギリシア = ポリス = 民主政というわけではない。

賢明な僭主と愚劣な僭主

ペイシストラトスの僭主政...国力の充実

死後息子（ヒッピアス、ヒッパルコス）の時代

共同統治期...穏健な政治 ヒッピアス（兄）によるヒッパルコス（弟）の暗殺

ヒッピアスの独裁...残虐な暴政を行う

反対勢力による打倒 亡命

アテナイ復権を目指してペルシア艦隊のマラトン上陸を手引き（ペルシア戦争）

クレイステネスの改革 ~ 民主政の基盤となる大改革

10 部族制の創設...血縁手結びつきの強い有力貴族の地盤を分断

500 人評議会...各部族から 50 人ずつの代表、実質的な国家運営の話し合い

10 人同僚制の採用...将軍（ストラテゴス）、戦士団（10 部族制に則る）など

区（デーモス）の創設...もっとも基本的な改革

市民団編成の単位として、デーモスの規模均質化を目指す

ポリスの政治組織のもっとも基本になる単位を創設

陶片追放（オストラキスモス）...陶片（オストラコン）に独裁者になりそうな人の名を

書く 記名数 6000 以上 国外追放

民主政の代名詞？ 実際には政争の道具

必ずしも民主政の防波堤として機能したのではない

アテナイ民主政のための制度的枠組みの創出

民衆の国政参加意思が重要になっていく

ペルシア戦争 ~ 下層民に政治参加の意思が定着

オリエントとギリシア

ポリス成立初期...オリエントに近い地域で成立

ie . ギリシア文明 = オリエントの影響下に発展した独自の二次文明

第一回ペルシア戦争（前 490）...マラトンの戦いでの重層歩兵軍団のペルシア軍撃退

戦争参加者は富裕市民

アッティカ地方ラウレイオンでの銀鉱脈発見 海軍力の強化（テミストクレス）

第二回ペルシア戦争（前 480）...サラミスの海戦でのペルシア艦隊撃退

カリアスの和約（前 449）...ペルシア戦争の終結

意義...海軍力による勝利 下層民が漕ぎ手として戦争参加（民主政確立の枢要）

戦争直接参加による下層民の国政意識の高まり、政治的発言力の強化

アテナイ民主政の光と影

ペルシア戦争後...ペルシア帝国の脅威存続 デロス同盟（対ペルシア防衛同盟）の成立

アテナイ中心に アテナイ、デロス同盟盟主としての脅威増大

アテナイ国内での改革

エフィアルテスの改革（前 462）...アレイオス・パゴス会議（長老会的存在）の実権

剥奪 貴族支配の牙城崩壊

ペリクレスの登場...ポリス内 民主主義の具体的実現

対外的 帝国主義的行動

アテナイはギリシア随一の富裕国へ
デロス同盟の金庫...デロス島 アテナイ（前 454） アテナイによる管理運営
「アテナイ帝国」化
ペリクレスの市民権法（前 451）...両親ともアテナイ市民でなければ出生児はアテナイ市民になれない 市民身分の閉鎖化
対外的にはアテナイがポリス市民の閉鎖集団として立ち現れることに
パルテノン神殿の完成（前 432）デロス同盟の金庫移転による財力
数多くの公共建築物の建設

ペロポネソス戦争 ~アテナイの凋落、スパルタの覇権
アテナイ嫌悪の対抗勢力（スパルタ盟主のポリス連合）の台頭
ペロポネソス戦争の勃発（前 431）...トゥキディデスの記述
アテナイ...籠城策 衛生環境の悪化 疫病の流行（全人口の 1/3 が失われる）
ペリクレス死去 デマゴーコス（扇動政治家）の登場
アルキビディアデス...シチリア島（スパルタの食糧供給源）に遠征 大失敗
アテネの敗北、スパルタがギリシア世界に覇権

ポリスの変質
アテナイの凋落 スパルタ勢力と北方テーベ勢力の競合（前 4 世紀前半）
スパルタ...平等者としての市民理念を典型的に実現、鎖国的体制（貨幣流通の制限）
覇権を握る 国外監督者の必要性 外部との接触大 社会体制の変質
アテナイ、スパルタ等の諸勢力、ポリスの国力弱体化 大国ペルシアの影響力高まる
様々な問題に介入 大王の和約（前 386）...ペルシア国王の力を借りながらギリシア
人諸勢力間の争いが一応解決
前 4 世紀の特徴...傭兵の一般化 市民皆兵原則の崩壊
農耕市民の戦士共同体であるはずのポリス変質

マケドニアの台頭

古典期の文化
ギリシア人...悲劇よりも喜劇を好む
cf. アリストテレスの言葉（レジュメ参照）
悲劇の中では人間の優れた部分が描かれる
アイスキュロス、ソフォクレス、エウリピデス...三大悲劇作家
アリストファネス...喜劇作家

定例行事祝祭中に上演...富裕市民による公共奉仕としての費用負担
ギリシア哲学、科学...近代に結び付く学問の基礎
出発点...イオニア自然哲学（イオニア...オリエントに最も近い位置にあるため）

ターレス（万物の根源は水） ヘラクレイトス（万物流転「パンタ・レイ」）
ソフィスト（知者）...論理学や修辞学として自然哲学を発展

民主的な議論の展開

主観のみの重視、客観的価値の喪失 公衆道徳の崩壊

ソクラテス、プラトン、アリストテレス...客観的真理の存在主張

数学ピタゴラス、医学ヒポクラテス 科学的観察による医学的思想の誕生（前 5 世紀）

歴史学...ヘロドトス、トゥキディデス 歴史を語る営みの本格的始まり

第 7 講 地中海世界とヘレニズム

ポリス...意味を失いながら都市国家の基盤にもほころび 諸勢力の乱立

強力な覇権国家登場（世界帝国の継承）

マケドニア王国

ドーリス系王朝のエトノス国家（農耕と牧畜） フィリッポス 2 世による国内結束

フィリッポスの政策...軍事力の強化（騎馬軍団の充実、長槍（サリッサ）密集部隊）

巧みな外交戦略 = マケドニアの存在感誇示

カイロネイアの戦い（前 338）アテネ、テーベ連合軍を破る ギリシア世界の覇権確立

ヘラス（コリントス）同盟の結成 ギリシア・ポリス間の盟主に

アレクサンドロス大王の東方遠征

（詳しい戦いはレジュメ参照）

イッソスの戦い...ペルシア王ダレイオス 3 世を打ち破る

南下してフェニキア諸都市を制圧 エジプト制圧 アレクサンドリア市建設

アルベラの戦い...ペルシア軍に大勝、アケメネス朝瓦解

中央アジア、インド北西部に進攻、各地にアレクサンドリア市建設

ギリシア世界とオリエント世界の融合

ギリシア人とペルシア人の混血奨励

ペルシア帝国の専制君主政を支える官僚統治機構を踏襲

ギリシア人を中枢に持つペルシア人官僚の行政機構

マケドニア人とペルシア人の混成部隊による軍隊

商業交易活動に大きな刺激、

ギリシア語を共通語（コイナー）として利用

ディアドコイ（後継者）の争い（およそ 40 年間）

ヘレニズム諸国家

セレウコス朝シリア（前 312 ~ 前 63）...帝国東部

首都：セレウキア アンティオキア

分裂

西方小アジア = ペルガモン王国が覇権

...アッタロス朝の独立国

ローマとの絆（大図書館、ゼウス祭壇）

鉱産物資源、手工業の発達

東部遠方 = バクトリア王国

...アフガニスタン北西部中心、ギリシア系、「大夏」

北方遊牧民の侵入 分裂、滅亡

トルクメニスタン西南部 = パルティア王国

...アルサケス建国、「安息」

ゾロアスター教を奉じる、ヘレニズム文化受容

アンティゴノス朝マケドニア（前 306 ~ 前 168）帝国本土

遺領全域支配を目指す 失敗

ギリシア的統治体制による支配

ハンニバルと同盟、ローマと対立 滅亡（ピュドナの戦い）

プトレマイオス朝エジプト（前 304 ~ 前 30）

首都：アレクサンドリア...繁栄

産業の統制、ヘレニズム文化の集大成

ギリシア文化を共通項とする地中海世界・文明の成立

コイナーの普及...多様な言語で表現されていたオリエントの学問・思想がギリシア語で表現

ギリシア語を学ぶ人の増加 普遍的な学問・思想が生み出される

（医学、天文学などの自然科学、数学、論理学）

ポリス...政治的重要性を失う

民族的、都市国家的枠組みを超えた普遍的な世界市民（コスモポリタン）の意識

（ストア派）

個人主義の精神も強まる（エピクロス派）

ともに精神のやすらぎを求める

交易ネットワークの結節点（コイナーによる交流の基盤）

ヘレニズム期...空前絶後の宗教混合（シンクレティズム）

ex . ギリシアのディオニシオス神、エジプトのイシス神の世界各地での信奉

運命を克服し救済の約束にあずかろうとする人々の希求

第 8 講 ローマ共和政

西地中海世界の先住民族とローマ人

西地中海世界先住の民族 = 地中海人種 ~ 母権制的要素が濃厚な社会

ex . エトルリア人...後のローマ人に大きな影響

印欧語系諸民族（＝イタリキ）の移住　～家父長制の親族集団、祖先崇拜に熱心
（前 1000 年ころ）

エトルリア人とローマ人

ヴィラノヴァ文化（初期鉄器時代）＋オリエント化＝「ラセンナ（エトルリア人）」

エトルリア人＝都市国家建設、海上交易で繁栄　勢力圏の拡大

エトルリア人、ローマへ侵入（ローマの中継基地としての利点に目を付けた？）

＝ローマ...エトルリア系の有力者による王政（5,6,7 代）　エトルリア勢力の覇権
土木事業の実施（城壁建造等）

クラシス・ケントゥリア制（財産級市民兵団、選挙制度）（王政 6 代目）

財産で 5 つのクラシス（階級）に分けられケントゥリア（百人組）に配属

トリプス（徴兵、課税の基盤）区分（戸口調査による市民登録）（総数 35 のトリプスとケンスス（戸口調査））、重装歩兵密集部隊

領域拡大と市民団の増大　ラティウムにおける覇権（cf. 分割統治）

都市国家から世界帝国へ

イタリア半島の征服（前 290）...山岳民、ラテン同盟（イタリキ）の征服、分割統治

西地中海における覇権（前 146）...ポエニ戦争（カルタゴの征服）

東地中海における覇権...マケドニア、ギリシアの征服

ローマの国制

S.P.Q.R（ローマの元老院と民衆）...ローマ人による国家の呼称、身分制秩序

王政期の長老会　元老院、長老（パトレス）　貴族（パトリキ）　プレブス（平民）

パトリキとプレブスの対立（身分闘争）

護民官の設置（神聖不可侵）　貴族が独占する掟の条文法としての公開（十二表法）

政体循環論...ギリシア・ポリス＝王政　貴族政　僭主政　民主政　衆愚制　独裁政　...

内部対立の繰返し、外に向けるべきエネルギーの損失

混合政体論...貴族政（元老院）　独裁政（コンスル）　民主政（民会）が勢力を均衡

互いに牽制しあう　エネルギー損失が少ない

ゆえに　政体循環論＜混合政体論

身分闘争　貴族と平民有力者　新貴族の台頭（元老院支配）

公民権政策の開放性

ギリシア・ポリス...閉鎖的　cf. ペリクレスの市民権法

ローマ...開放的

ローマ人の宗教

保守主義（厳格な手続き、清廉潔白、神々への誓約の尊重）　敬虔、篤実

祭儀宗教　国家及び共同体の鎮護

ギリシア人の宗教　～観（テオーリア）　祝祭宗教、陽気　個人救済

共和政社会の動揺

ポエニ戦争...カルタゴのハンニバルのローマ侵入による土地の荒廃 回復に手間取る

農民 = 征服戦争の担い手 土地がますます荒廃

元老院議員...商業活動の禁止 土地への投資活発化 大土地所有者に成長、属州

征服戦争による捕虜（奴隷）の安定供給

奴隷制ラティフンディア（土地所有の集積 + 奴隷労働力）

ローマ帝国主義（Roman Imperialism）をめぐって

先手防衛論（外敵の脅威に対して）

騎士身分層の台頭（大土地所有による）

平民の不満をそらす（土地所有の機会に与らせる）

群集心理の利用

グラックス兄弟の改革 ~ 貧民救済、自作農創設 国防力の再建

一定規模の公有地を占有する者の土地を国に返還 無産市民に分配

既得権の剥奪を嫌う大土地所有者（貴族、富裕者）の抵抗 失敗

党派の争い ~ 閥族派（スッラ）と平民派（マリウス）

傭兵の一般化...将軍と傭兵の信義の関係で結ばれる

閥族派の勝利 護民官の権利縮小、元老院の権威強化、グラックス兄弟以前の状態に

有力武将の台頭と元老院支配の凋落

ポンペイウス...奴隷反乱の鎮圧、海賊の掃討、東方の平定に活躍

第一回三頭政治 ~ 元老院支配に対抗

ポンペイウス（武勲）、クラッスス（財産）、カエサル（度量、弁巧）

第9講 地中海世界帝国の形成

カエサル死後...オクタヴィアヌス、アントニウス、レピドゥスによる第二回三頭政治

元老院保守派の粛清 オクタヴィアヌスの台頭

元首（皇帝）権力の成立

アウグストゥスによる国家の再建（皇帝権力の成立）

『神皇アウグストゥス業績録』にみられる政治的配慮、イデオロギー

「カエサルのような独裁者になるのでは」という懸念の払拭

権力への無欲、権威の重視

市民共同体における個人支配の正当化

共和政（形式的）公職の兼任、共和政の公職としての慣例に従うのみ

元首政（事実上）強大な権威、声望

皇帝権力の継承

ユリウス・クラウディウス家の皇帝たち

アウグストゥス（前 27～14）ゲルマニクスへの期待、権威の重視
ティベリウス（14～37）ゲルマニクスの死後、民衆の信望薄
カリグラ（ガイウス）（37～41）ゲルマニクスの子、民衆の期待、元老院無視、暴政
クラウディウス（41～54）ゲルマニクスの弟、表向き元老院尊重、官僚制の整備
ネロ（54～68）ゲルマニクスの孫、セネカなどの補佐、前半＝善政

後半＝独善的、暴政

cf. ゲルマニクス…アウグストゥスの後継者、民衆への人気大

人気絶頂で不可解な死、理想の為政者

フラウィウス家の皇帝たち

ウェスパシアヌス…ネロ帝死後の内乱を勝ち抜く 皇帝に

ウェスパシアヌス（69～79）権力正当化のため苦心、帝国の再建、財政再建、
民衆支持拡大のための散財、コロッセオの建立

ティトゥス（79～81）人望厚、名君、ポンペイ埋没

ドミティアヌス（81～96）猜疑心強、財政管理、属州統治、国境防衛に成果
元老院無視、迫害、恐怖政治的、暗殺

ローマの身分と階層 ～自由人と奴隷に大別

自由人身分（生来自由人と被解放者）

ローマ市民

皇帝とその一族

元老院議員身分（資産 100 万セステルティ以上）

騎士身分（資産 40 万セステルティ以上）

都市参事会員身分（資産 10 万セステルティ以上）

平民身分（下層身分）

上層身分

（上層民）

非ローマ市民

外人

奴隷身分 ～人間としては扱われず

医師や教師などの専門知識を持つ高級な奴隷も存在、大部分は労務奴隷

cf. クラシス・ケントゥリア制

ポンペイ社会（グラフィティから見る）

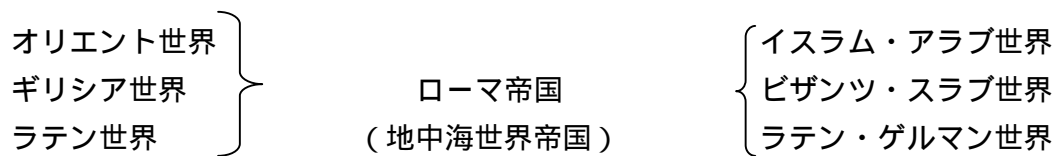
ポンペイ…79 年のヴェスビオ山大噴火により埋没（ティトゥス）

18 世紀半ばからの発掘、多数のグラフィティ（公示、広告、落書）

古代地中海世界の識字率の高さを表す？

第 10 講 「ローマの平和」と地中海世界の融和

地中海世界…ローマ帝国によって軍事的、政治的に統合された世界



古代地中海世界の近代性 ~ 海（地中海）の利用

穏やかなる内海、海賊の一掃 近代の海域世界のさきがけ

日常生活物資の海上交易

物資・情報の交換 文化交流 文明融和の基盤（学問の発達も促される）

文明融和の核としての皇帝

賢帝とは？（賢帝の代表例）

アウグストゥス帝...共和政体の中の元首支配の確立（個人支配の色合いを出さない）

ウェスパシアヌス帝...（地方出身初の皇帝）帝国の安定、寛容、ユーモア、質素

五賢帝時代 ~ 人類の至福の時代（ギボン）

ネルヴァ帝（96～98）ドミティアヌスの死後即位、元老院との協調、

すぐれた人物を後継者として養子にするという先例誕生

トラヤヌス帝（98～117）属州出身初の皇帝、外征に熱心、帝国の版図最大に

元老院の尊重、救貧制度の拡充（アメリント制度）、貢租の軽減、公共事業振興

cf. アメリント制度...貧しい少年、少女の扶養基金

ハドリアヌス帝（117～138）領土の現状維持を目指す、属州視察旅行、帝国の安定

官僚制の整備、国家機構が自律的に作動する装置として確立、文化と芸術を重視

アントニヌス帝（138～161）野心なし、誠実、正直、繁栄と平和の時代

元老院との協調、財政の節約

マルクス・アウレリウス帝（161～180）哲人、苦境（パルティア人の侵寇、疫病の

発生、ゲルマン人の侵入）に誠実に対処

『自省録』...宗教と道徳への深い洞察

世襲原則に立ち返って実子を後継者に

パンテオン

アウグストゥス帝の側近アグリッパの建立、ハドリアヌス帝の再建

円堂形式の神殿 ひとつの完結した世界（オイクメネ）としてのローマ帝国の象徴

ローマ帝国公認の全神々をまつる

ハドリアヌス帝の属州視察

帝国の安寧...皇帝に対する民衆の信頼と畏敬の念をえることを目的

第 11 講 地中海世界の混迷と再編

皇帝の権威と権力

皇帝の権威...皇帝位の正当性=神格化なされなければならない

五賢帝...徳と軍事力において優れる cf. 国防費...国庫の 7 割

実子コンモドゥス帝の不徳...権威（徳）の治世（五賢帝時代）の失墜

セウェルス家（フェニキア系）の支配...パンノニア総督セプティミウス＝セウェルス
アフリカ出身のカルタゴ人の血をひく皇帝

内政改革...軍事力の強調 cf. セウェルス帝の遺訓

行政機構全体に軍人色、軍人への優遇姿勢が強まる

元老院議員の処刑、財産没収 元老院の権威失墜

元老院の意向 < 軍隊の意向

カラカラ勅令（アントニヌス勅法）

= 全自由人へのローマ市民権の付与...税収の増加狙う

cf. 市民権のない者は相続税、奴隷解放税を払う必要がなかった

市民法と万民法の一体化 帝国公民権（自治と自由の平準化 / 低下）

「3 世紀の危機」

背景...異民族の侵入による軍事力の必要性の増大

コンモドゥス帝に始まる財政危機、その後の皇帝の兵士優遇策による悪化

財政危機 経済危機 社会危機

財政危機...通貨改悪によって対処 帝国内のインフレーション激化

都市税収の減少と軍人手当の増大

軍人皇帝時代（235～284）公認皇帝 26 人 + 副帝 3 人 + 自称皇帝 41 人

社会不安の増大 古典文明の変質（宗教の重要性が増大）

東方宗教の浸透とキリスト教集団の出現

イシスなどの東方宗教の神々への信仰（個人救済を願う）

ナザレのイエス イエス運動（ユダヤ教の異端運動？）

原始キリスト教の段階ではほとんど認知されていない

権力（皇帝）の側からかわりを持つことはほとんどなかった

3 世紀半ば 帝国全土の規模における迫害（デキウス帝）

国家宗教の再興、統合を目的

以上 6/30 分まで作りました。これ以降は前バラシ後に作りたいと思います。

内容に質問がある場合は島崎までご連絡ください

第12講 古代末期と地中海文明の変質

このような見出しを掲げてはいますが前バラシブリントを見ていただければわかるとおりこの前の講義（7/14）で重要なところはほぼポンペイの史料となっていることがわかれると思います。よって史料集 p.193～196 を読んでおいてください。

特別講 試験対策

というわけでここからは試験対策です

（A）ギリシアにおけるポリスの成立についてオリент社会と比較しながら世界史的視野で論じなさい

ポリス成立の背景

都市国家以前 ～ミュケナイ時代（前2000 年紀後半）

ピュロス王国の事例

王宮社会と村落社会に大別

王宮社会...王（ヴァナカ）>軍司令官>従士団>王所有の奴隷

村落（ダーモ）...村落の首長たる豪族（クァシレウ）の指導下に民衆

大工、鍛冶屋など存在するも基本的には農民

王宮が多くの村落の上に君臨

『村落支配を基盤とする萌芽的な官僚機構を備えた貢納王政』

オリントの専制王政に類似（後代ギリシア・ポリスとは構造が異なる）

のちのポリスの国家領域より広大な諸王国の群立状態

ホメロスの社会

ポリス成立初期（ホメロスの生きた時代）

当時の社会...村落共同体ごとの小さな社会、豪族と民衆の協調

豪族...クァシレウ（ミュケナイ時代） バシレウス（王）（古典期ギリシア語）

民衆...ダーモからデーモスへと変化

バシレウスとデーモスの協調関係

都市国家の成立：シュノイクスモス（集住）

前述の村落が地の利に恵まれた地域に集まって大集落を建設 ポリスの成立

バシレウスの集住

前8 世紀...ポリス社会＝オリントに近い地域で成立(オリントの影響を受けて成立)

ギリシア人の植民活動 ～ギリシアは平野に恵まれないため

シチリア島、イタリア南部（マグナ・グラキア）、リビア、黒海沿岸地域など

以上がポリス成立の背景です。次からはオリント社会との比較について述べていきたい
と思います。

ポリス社会ではミュケナイ時代の豪族であるクァシレウが（古典期のギリシア語ではバシレウスと変化していきますが）各村落に点在して民衆であるデーモス（ミュケナイ時代の「ダーモ」）との協調関係をもってそれぞれ村落社会を形成しておりそこからこうした村落が地の利に恵まれたところに集まって大集落を形成することでポリスとして成立しました（これを集住と呼びます）。初期には有力貴族が王として選出されていましたが（このときも王権は弱いものでした）が、やがて王権は分化していき、貴族の集団指導体制が確立しました。平民は私有地を所有して経済的に自立しており、貴族との差はそれほど大きくはなかったようです。ポリス内部では農耕市民の戦士共同体という理念の下、豪族（バシレウス）と民衆（デーモス）という身分差があったけれども身分による違いはそれほど小さくなく、建前的にはポリス市民は平等ということになっており外部に対して閉鎖的という特徴をもっていました

一方オリエント社会ですが、ここではミュケナイ時代のピュロス王国を例も参考に見ていきたいと思います。

ピュロス王国はオリエント社会の専制王政に非常に類似しています。ピュロス王国では大きく王宮社会と村落社会に区別され王宮社会には王（wanaka）、軍司令官（rewaketa）、従士団（equeta）、奴隷が存在しており、王国の中心となっていました。一方村落（damo）では豪族（qasireu、後のbasileus）の指導下に民衆（damo）が存在するという社会構成になっていました。そしてこれらの村落社会の上に王宮社会が君臨するという形となっており「村落社会を基盤とする萌芽的な官僚機構を備えた貢納王政」の世界となっていました。すなわちオリエント社会の王国の領域はポリスに比べ大きく、官僚機構を備えており民衆が貢納の義務を負っていた、という点で違いが表れていると思われます。

ただし、オリエントにおいてもシュメール人の都市国家、エジプトのノモス、同時代ではフェニキア人の都市国家などの例が見られます。しかし、上で述べた「族長的貴族と民衆との協調的關係」「農耕市民の戦士共同体」というポリスの性格はこれらの都市国家とは大きく異なるものでした。また、普通都市国家が形成されると、次第に領域国家、統一国家へと発展しますが、ギリシアでは長い間それが進みませんでした。要因としては、生産力の低さのため（ギリシアは山がちで、土壌にもあまり恵まれていません。このために植民活動が盛んに行われました）広域的な強権が成立するのが困難だったことが挙げられます。

以上を参考にしてうまく十五行以内にまとめてください。

(B) ローマ帝国について「多神教世界帝国から一神教世界帝国へ」という図式で理解したとき、現代に生きるものとしてどのような意味があるといえるのだろうか。講義を参考にしながら自分の意見を述べなさい。

という問題ですが、「自分の意見を述べなさい」と書いてある以上皆さんの意見を述べていただければなりません。というわけで核心部分は皆さんで頑張っていたかなければなりません。ここではこの図式の歴史的な背景について述べさせていただきたいと思います。

1、多神教世界帝国としてのローマ

ローマ帝国は共和政の時代から積極的な外征を続けていき、その過程で様々な民族を征服しましたが、どの地においても寛容政策をとり続け、その土地固有の宗教、文化、慣習を尊重し、取り入れていきました。その結果ローマ帝国内部にはローマ固有の神々以外にも被征服民族の神々も多数流入することとなりました。それを如実に示すのがパンテオン（万神殿）です。アウグストゥスの側近アグリッパによって建立されハドリアヌス帝によって再建されたこの神殿にはローマの神々以外にも征服した諸民族の神々も、ローマの神々として分け隔てなく祀りました。ギリシアの酒の神、ディオニシオスやエジプトの女神イシスの信仰はローマ人の間にも広がっていました。

2、一神教世界帝国への変貌

ではなぜこのような多神教の伝統から一神教へと変化していったのでしょうか。いろいろな要因が考えられますが主なものは次の三つです。

A, a. 混乱と社会不安

「三世紀の危機」以後の混迷と不安の時代にあって、人々は、小さな力しかふるえない神々でなく、強力な唯一神に救済を求めました。ローマ帝国の勢威は衰え、「神々はわれわれを見捨てたのではないか」とローマ古来の神々への信仰は揺らいでいました。

b. 皇帝による振興策

上で述べたとおり、コンスタンティヌス以後の皇帝は、積極的なキリスト教振興策を行いました。皇帝個人の信仰は別にして、キリスト教は皇帝にとって、「支配の道具」として有用でした。元首政時代、皇帝の権力は（建前上）「ローマの元老院および市民（SPQR）」が与えるものでしたが、それを神が与えるものとするので、専制君主政《ドミナトゥス》を強化することができました。

c. キリスト教を受け入れる素地

本村氏は、ローマの多神教とキリスト教に共通する点を指摘しています。それは生贄を捧げる犠牲式です。多神教地中海世界に生贄の儀礼は際だっていましたが、キリスト教では神の子イエスが総ての人類を救うため犠牲となりました。これは混乱の世に救いを求める人々にはたいへんな衝撃だったのです。また、ストア派やエピクロス派以来の、心の豊かさを求める「禁欲の心性」は、初期キリスト教の理念と一致するものでした。

3、現代に生きる我々に対する意味

これが問題の核心です。参考程度に二つの見方をあげておきたいと思います。

現代への意味というのだから一神教への変化の状況と現代社会の類似点をあげてみてもよいかもしれません。

一神教への変貌の主な要因に社会不安の増大という問題が挙げられます。社会不安の増大という状況は現代社会にも見られているのではないのでしょうか（物価上昇、格差社会...etc）。だから強大な力への憧憬から一神教への変貌を遂げたローマ帝国と現代社会の比較もありかも知れません。

他には一神教が現代社会に与えている影響について書くというのもありかも知れません。世界三大宗教のうちのふたつ（イスラム教、キリスト教）は一神教を奉じています。言い換えればローマ帝国の一神教帝国化が現代まで影響を及ぼしているという風にも見えます。ゆえにこの図式が現代の宗教生活に大して意味を持っているという視点から論を進めてもいいかもしれません。

以上愚見を述べさせていただきましたがこの二つが最良というわけではもちろんありません。一つの見方としてこういうものもあるのかな程度に参考にしてください。

下記の史料についてそこからいかなる歴史的背景を知ることができるかそれについて簡潔に記しなさい。

講義で取り上げられていたのは次の史料です。1, 2, 25, 30, 31, 51, 77, 82, 89, 96, 100, 103, 108, 110, 112, 120, 126。これらの歴史的背景は史料集でも説明されていますしレジュメにもおおむね説明が載っています。ですので、それを参考にしてください。

長くなりましたがこれで特別講は終わりです。質問、意味不明なところがあったら島崎（g810309）のところまでご連絡ください。それではテスト頑張ってください。